

令和 7 年 6 月 10 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2022～2024

課題番号：22K04497

研究課題名（和文）伝統的居住空間の共有性・継承性と連鎖網の動態 - 中国黄土高原の窑洞を対象に -

研究課題名（英文）Dynamism of Shareability, Inheritability and Chain Network of Traditional Living Space: About Yao-dong in China's loess plateau

研究代表者

栗原 伸治 (KURIHARA, Shinji)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：60318384

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者らは1981年以降、中国黄土高原の伝統的な穴居の「窑洞」を対象とした調査研究をおこなってきた。その際、窑洞の特異な居住空間を、いわば「空間ありき」「人間ありき」という観点から認識してきた。しかし、近年、人間/自然などの二元論を超えて、動植物、物、神など多様な環境構成要素を人間と同等に扱う新たな人類学的な観点も注目されている。

本研究では、両観点を接続させて、これまでに蓄積した資料と現地調査から抽出する構成要素を空間-人間中心の見方から一旦解放し、動的ネットワークをなす同等の要素として扱った。そのことにより、伝統的居住空間の共有性・継承性と連鎖網の動態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

窑洞は、地質的特徴をもった地理的範囲である黄土高原の伝統的な穴居である。穴居だからこそ、黄土高原のなかでは普遍的にみられるものの、黄土高原を超えては存在しえない。そのため、窑洞の居住空間は、黄土高原の人間もふくめた生態系のなかで共有され継承されてきた。本研究では微生物、植物、動物、人間、神、ものといった構成要素を同等に扱って、その動的ネットワークについて考察した。従来は窑洞の居住空間のなかに構成要素を描いていたが、本研究では構成要素の連鎖網のなかで居住空間を描いていった。このように、新たな観点から伝統的居住空間を捉えて描いた点に、本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：Since 1981, we have been conducting research on the traditional cave dwellings "Yangdong" on the Loess Plateau in China. In these studies, we have recognized the peculiar living space of cave dwellings from the perspective of "space and human". In recent years, however, a new anthropological perspective that goes beyond the dualism of human/nature, etc. and treats diverse environmental components such as plants, animals, objects, and gods as equal to humans has also been attracting attention.

In this study, by connecting the two perspectives, we have freed the components we have accumulated so far and newly extracted from field surveys from the "space-human" centered view, and treated them as equal elements that form a dynamic network. By doing so, the shared and inherited nature of traditional residential space and the dynamics of the chain network were clarified.

研究分野：建築人類学

キーワード：認識論的転回 存在論的転回 微生物 植物 動物 人間 神 もの

1. 研究開始当初の背景

建築学と人類学は、パラダイムにおうじて接近/離反を繰り返してきたが、ついには結合して「建築人類学」とよばれる学問分野が生まれることとなった。しかしながら、1980年代以降の人類学は、異文化へのまなざしに潜む偏見や政治性、調査者/被調査者の非対称性を暴きたて、自己反省をした。2000年代前半までつづいたこの潮流は「再帰人類学」とよばれ、このように視点を変える認識論的転回のなかで、建築学とは離反していった。

一方、この潮流の背後では構造主義の流れをくむ存在論的転回もみられるようになった。こちらは、一なる文化、多様な自然という見方の多自然主義、脱人間中心主義のマルチスピーシーズの人類学、エージェンシー(行為主体)のネットワークにおける結節点として多様なアクター(行為者)を捉えたアクターネットワーク理論などへと展開していく。存在論的転回は認識論的転回への批判であり、両者は断絶したものと捉えられている。

ところが、居住空間では、空間を媒介に、両者はつながり共存しているのではないかとくに異文化の伝統的居住空間は、われわれから遠い世界だからこそ、両者の共存が顕在化するのではないかとこの考えも一方でわいてきた。このような思考が研究開始当初の背景にあった。

2. 研究の目的

中国黄土高原には「窯洞」とよばれる伝統的な穴居が存在する。私たちは1981年から窯洞を対象とした調査研究をおこなってきた。その際、窯洞の特異な居住空間を、いわば「空間ありき」「人間ありき」という観点から認識してきた。これは認識論的転回にもとづいた観点である。一方で、近年、人間/自然などの二元論を超えて、動植物、物、神、ものなど多様な環境構成要素を人間と同等に扱う新たな人類学的観点、つまり存在論的転回もみられるようになった。

本研究では、両観点の共存を視野に入れつつ接続させて、これまでに蓄積した資料と現地調査から抽出する構成要素を空間-人間中心の見方から一旦解放し、動的ネットワークをなす同等の要素として扱う。そのことにより、伝統的居住空間の共有性・継承性と連鎖網の動態について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法により展開する。

- ・ 建築学と人類学の関係史を再整理し、これまで蓄積してきた窯洞研究を位置づける。
- ・ をもとに、中国黄土高原の南部地域と北部地域において、現地調査を実施する。
- ・ で得られたデータを整理・分析して、窯洞の伝統的居住空間における空間の共有性、継承性と構成要素の連鎖網の動態について考察・表現する。

4. 研究成果

(1) 建築学と人類学の関係史の再整理とこれまでの窯洞研究の位置づけ

近代学問において、物質文化のなかの住文化研究は建築学でも人類学でもおこなわれてきた。その後、進化論、伝播論、機能主義、構造主義などのパラダイムにおうじて建築学と人類学は接近/離反を繰り返し、ついには結合して「建築人類学」が生まれることとなった(図1右)。

しかし、1980~2000年代前半までの人類学では、異文化へのまなざしに潜む偏見や政治性、調査者/被調査者の非対称性を暴きたる「再帰人類学」とよばれる潮流がみられるようになり、このような認識論的転回のなかで建築学と人類学は離反していき膠着状態へと陥った。一方で、この潮流の背後では構造主義の流れをくむ存在論的転回もみられるようになった。こちらは、一なる文化、多様な自然という見方の多自然主義、脱人間中心主義のマルチスピーシーズの人類学、エージェンシー(行為主体)のネットワークにおける結節点として多様なアクター(行為者)を捉えたアクターネットワーク理論などへと展開していく。そして、建築学と人類学は、ついには融合することとなった(図1左)。

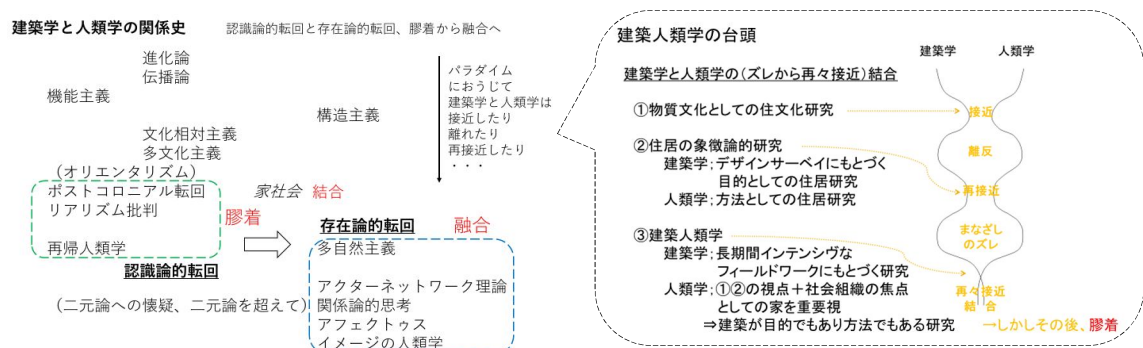
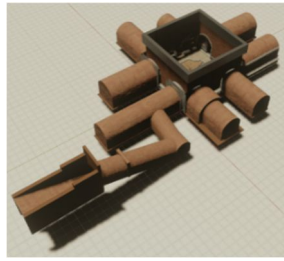


図1 建築学と人類学の関係史



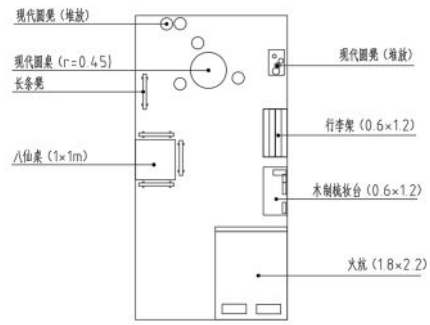
下沈式窑洞の居住空間の構成 (制作: 安達原終平)



下沈式窑洞の中庭空間



窑洞G地下层平面图
0 10m N



IN2-正房-室内平面图-物品名称

図2 居住空間とその構成要素 (正房東側) (制作: 柏社村地坑院調研-第一組)

研究代表者らがこれまでおこなってきた窑洞研究は、建築類型学的観点から窑洞を構築物として捉えた研究 (e.g. 窑洞考察団 1988)、「人間ありき」の観点から人間が住まう空間として捉えた研究 (e.g. *ibid.*)と「空間ありき」の観点から社会集団を再生産する媒介として捉えた研究 (e.g. 栗原 1998; 深尾、井口、栗原 2000(2007))に再整理できる。また、これらは、いずれも認識論的転回にもとづく研究と位置づけることができる。さらに、この「空間ありき」の観点からおこなった研究では、窑洞の居住空間を媒介とした社会集団が存在することを指摘したが、これはまさしく空間の共有性・継承性がもたらす空間の「力」といえよう。

(2) 黄土高原南部地域と北部地域における現地調査

黄土高原の南部地域では 2023 年 9 月と 2025 年 1 月に陝西省咸陽市三原県柏社村において、北部地域では 2023 年 9 月に陝西省延安市棗園村、甄家湾、南泥湾にて、2024 年 9 月には榆林市子洲県曹家硷村において現地調査を実施した。この調査は、西安交通大学、西安建築科技大学、蘇州大学、湖南大学、大連理工大学の学生と、いわば「ワークショップ型フィールドワーク」により実施した。まずは背景となる学説史 (e.g. ラトゥール 2019; チン 2019; 奥野 2021; インゴルド 2020; 佐藤 2002) や調査の視点・方法に関して私たちがプレゼンテーションをし、そのうえでそれらにもとづき共同調査をした。最後に調査成果について、学生にプレゼンテーションをしてもらい討論をした。

黄土高原の南部地域での調査終了後は、学生がまとめた成果 (図 2) をもとに、各構成要素について整理し一覧表を作成した。結果、移動可能な物 (142)、移動不可能な物 (88)、植物 (39) など計 362 の構成要素に関する整理ができた。

一方、黄土高原の北部地域でも、実測による図面化 (図 3) にくわえ、2023 年度の南部地域での分析時の整理で作成した表を活用して調査した (表 1)。この表には「構成要素が存在する対象窑洞、その窑洞内での場所 (平面のエリア、エリア内位置、居室内の位置、断面レベル)、構成要素の名称、分類、細分類、つながりにおける役割」のカラムがある。調査中には、実測図面のなかに構成要素を描きつつ、この表の各セルも埋めていった。その際、構成要素は生物を中心にひとつひとつを収集し、非生物については農具・工具、建材、燃料・肥料などの分類でまとめて収集した。結果、調査対象の 6 世帯において 150 種の構成要素が抽出された。ここに、実測図面に描き込まれていた構成要素と、研究代表者らが現地で確認したり、撮影した写真から判断したりした構成要素の分類をプラスしたところ、のべ 236 種の構成要素が抽出できた。

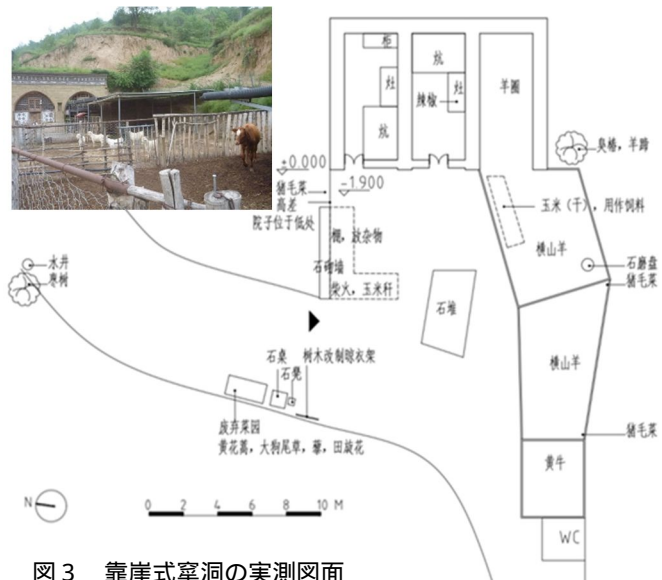


図3 崖式窑洞の実測図面 (制作: 任毓琳、曹瑞萌、梁嘉琪、関家儀、楊夢嬌、劉琨琦)

表1 調査時に使用した構成要素記入用シート（日本語に訳して一部抜粋）

対象窟洞	場所				構成要素の名称	分類	細分類	つながりにおける役割	備考
	平面のエリア	エリア内位置	居室内の位置	断面のレベル					
A06	C	7&8		GL	山羊	動物	羊	食べられる、売られる	
A06	C	9		GL	黄牛	動物	牛	食べられる、売られる	
A06	C	1&8&9		GL	フタクサ	植物	野草	水土を維持、飼料用	
A06	C	1		GL	トウモロコシの芯	植物	薪	燃料用	
A06	C	3		GL	アルデミア	植物	野草	水土を維持、飼料用	
A06	C	3		GL	オオイヌノフグリ	植物	野草	水土を維持、飼料用	
A06	C	3		GL	キヌア	植物	野草	水土を維持、飼料用	
A06	C	3		GL	ハウレンソウ	植物	野草	水土を維持、観賞用	
A06					ナツメ	植物	果菜	食べられる	入口の上の壁
A06	IE		2		唐辛子	植物	野菜	食べられる	
A06	C	7		H	トウモロコシ	植物	蔬菜	飼料用	
A06	O	7		2F	ニワウルシ	植物	樹木	燃料用、観賞用	
A06	O	7		2F	羊蹄	植物	野草	水土を維持、飼料用	
A06	C	9		GL	牛糞	微生物	真菌	肥料用、燃料用	
A06	C	8		GL	石臼	移動不可の物		挽く	
A06	C	3		GL	樹木をもちいた棚	移動不可の物	生活用品	洗濯物を干す	
A06	C	3		GL	石机と椅子	移動不可の物	生活用品	休憩	
A06				GL	良質の水の井戸	神		水を提供する	入口のところ

凡例
 平面のエリア
 C：中庭
 IE：東側の横穴内部
 エリア内位置
 （中庭を9等分）
 1, 2, 3...9：
 北東、北中央、北西...南西
 居室内の位置
 1, 2, 3：入口、中央、奥

(3) 黄土高原南部の下沈式窟洞でみられる構成要素の連鎖網

(2)で再整理した一覧表を、マルチスピーシーズ (e.g. 日本文化人類学会 2021) と食物連鎖網の考え方をあわせて、生物的構成要素 (計 107) としての微生物、植物、動物、人間などと、非生物的構成要素 (計 255) としての家具・インテリアや設備、神などに分割して並び替えた。そして、構成要素を行為主体と捉えて、それらのつながりについても整理し図化した (図 4)。ここでは(2)で述べた調査の視点として示した概念にしたがい、食物連鎖網の考えを中心に据えつつ各構成要素 (斜体) を対等に捉えて、それらの関係の仕方を線の種類と言葉 (立体) により表現している。このような構成要素の連鎖網の図化によって、従来の建築図面をもとにした構成要素の関係とはちがう次元での捉え方が可能となる。すなわち、建築図面における居住空間同士の関係のなかで構成要素を表現するのではなく、構成要素の相互関係のなかで居住空間を表現して捉えることができた。

そして、おもな居住空間が地下レベルに位置する下沈式窟洞と地上家屋の構成要素の連鎖網の共通性、および地下にあるからこそその土や水との関係、構成要素による環境創造のあり方といった特異性 (緑の文字) も確認できた。

また、冬でも中庭空間の北側には陽がさして、そのことで空間が共有され、それを可能にする断面構成の空間が継承されてきたことも確認できた。

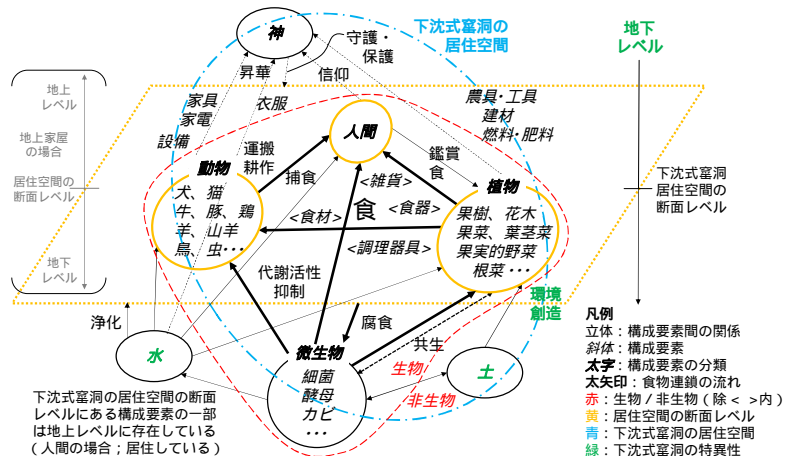


図4 下沈式窟洞の居住空間でみられる構成要素の連鎖網

(4) 黄土高原北部の崖式窟洞でみられる構成要素の連鎖網

(3)と同様に、微生物、植物、動物、人間、神との関係を中心とした構成要素の連鎖網を描いていった (図 5)。構成要素 (斜体) とその分類 (太字) と同士の関係については、食物連鎖の流れ (太矢印) と文字 (立体) によって表現している。また、赤で生物/非生物の範囲の区別を、青・黄・紫で高さ方向のレベル差を表現し、さらに崖式窟洞の特異性については緑の一点鎖線で囲って表現した。

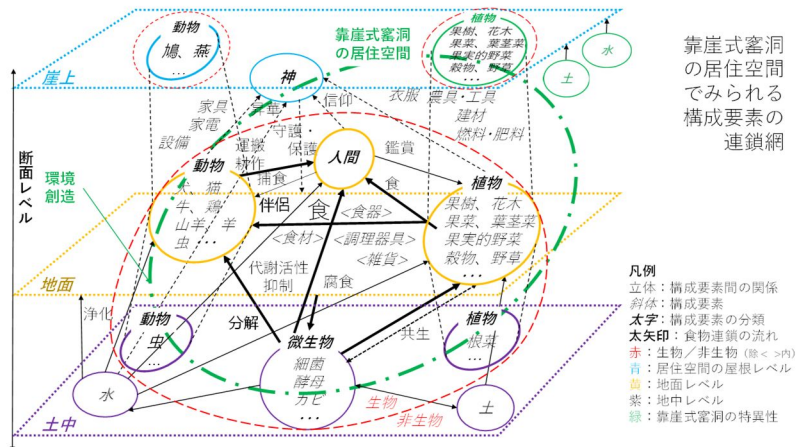


図5 崖式窟洞の居住空間でみられる構成要素の連鎖網

このような構成要素の連鎖網の図化により、南部地域の下沈式窑洞と同様に、従来の建築図面をもとにした構成要素の関係とは異なる次元での捉え方が可能となった。すなわち、建築図面のなかに各構成要素を表現するのではなく、構成要素の連鎖網のなかに高さ方向のレベル差、つまり断面レベルという尺度もくわえることで居住空間を表現した。

おもな居住空間が地下レベルにある下沈式窑洞とくらべれば、靠崖式窑洞の居住空間の特異性としては、以下の3点があげられ、図中にも表現することができた(緑の線や文字):

- ・土中 - 地面 - 崖上というレベル差のある斜面を掘ることで創造された環境をもつ居住空間である
- ・このことが活かされて、崖上レベルの有効活用もみられる
- ・居住空間の地面よりも上のレベルに土や水が存在することが、その有効活用を可能にしている

以上のような特異性をもつ靠崖式窑洞の居住空間を黄土高原北部地域の人びとは共有しつつ、世代を超えて継承してきた。なお、靠崖式窑洞のなかには、下沈式窑洞とくらべると、大門や塀が設けられていないなど、居住空間の領域が明確でないものも多い。しかしながら、居住空間の構成要素や、それらを設置したり利用したりするなどの住民の行動により、領域意識を読むことができる場合もあることが確認できた。

(5) まとめ

中国黄土高原の南部地域でみられる下沈式窑洞および北部地域でみられる靠崖式窑洞の居住空間がもたらす共有性とその継承性および構成要素の連鎖網について、ワークショップ型フィールドワークで得られたデータにもとづき考察・表現した。結果、従来のように居住空間の図面のなかに構成要素を描くのではなく、食物連鎖を中心とした構成要素の連鎖網のなかで居住空間を位置づけることが可能となった。また、その際、断面レベルも考慮したことで、下沈式窑洞と靠崖式窑洞のちがいについて表現することもできた。そして、これらによって生じる居住空間の共有性、継承性の一端についても明らかにできた。すなわち、本研究では、中国黄土高原の伝統的な窑洞を対象に、居住空間がもつ共有性、継承性および構成要素の連鎖網について、認識論的転回と存在論的転回の両観点で共存したかたちで考察し表現することができた。

しかしながら、この構成要素の連鎖網のなかで表現した居住空間の領域と住民の意識の領域にはズレもみられる。今後は、このズレもふくめた連鎖網の動態について考察・表現することが課題である。

<引用文献>

窑洞考察団：『生きている地下住居：中国の黄土高原に暮らす四〇〇〇万人』、彰国社、1988
栗原伸治：「埋もれゆく穴の住まい 窑洞：黄土高原の穴住民：中国」、佐藤浩司(編)『住まいに生きる』(シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》) 学芸出版社、1998、171-190

深尾葉子、井口淳子、栗原伸治：『黄土高原の村 音・空間・社会』、古今書院、2000
(中国語訳《黄土高原的村庄 - 声音・空間・社会》、林琦・朱家駿(訳)、民族出版社、2007
ブリュノ・ラトゥール：社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門、伊藤嘉高(翻訳)、法政大学出版局、2019

アナ・チン：まつたけ - 不確定な時代を生きる術、赤嶺淳(訳)、みすず書房、2019年
奥野克巳：特集 マルチスピーシーズ民族誌の眺望 - 多種の絡み合いから見る世界、文化人観学 86(1)、2021

ティム・インゴルド：人類学とはなにか、奥野克巳・宮崎幸子(訳)、亜紀書房、2020
佐藤浩司・山下里加：2002年ソウルスタイルその後 - 李さん一家の3200点 普通の生活(INAX BOOKLET) INAX 出版、2002

日本文化人類学会(編)：特集 マルチスピーシーズ民族誌の眺望 多種の絡まり合いから見る世界、文化人類学 vol.86-1、2021、44-114

栗原伸治、斎尾直子、齊応涛、大野隆造、八代克彦、米野雅之：「窑洞の居住空間における構成要素の連鎖網 - 中国黄土高原南部の下沈式窑洞を事例に - 」、2024 年度日本建築学会大会(関東) 学術講演梗概集(農村計画)、2024、57-58

栗原伸治、斎尾直子、齊応涛、大野隆造、八代克彦、米野雅之：「窑洞の居住空間における構成要素の連鎖網 その2 - 中国黄土高原北部の靠崖式窑洞を事例に - 」、2025 年度日本建築学会大会(関東) 学術講演梗概集(農村計画)、2025

<付記>

2023年の現地調査では「柏社村地坑院調研-第一組」(章序, 谢萧阳, 任毓琳, 曹瑞萌, 王清瑜, 张舸扬的各氏) 2024年は任毓琳、曹瑞萌、郭宸宇、梁嘉琪、関家儀、楊夢嬌、劉琨琦の各氏、2025年は任毓琳、郭宸宇の各氏にたいへんお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 井上果子・中野美季・栗原伸治	4. 巻 42
2. 論文標題 椎葉村の小集落で創造性を考える - 座談会フィールド訪問の取り組みから - (おもに地域スピリットの共有・継承・連鎖に関する図の制作を担当)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 94-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗原伸治	4. 巻 40
2. 論文標題 生のリアリティ・存在のリアリティを織りなす	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 186 187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2750/arp.40.186	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 7件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 栗原伸治
2. 発表標題 中国実地考察下生活と環境構建的現実性
3. 学会等名 " 鄉村振興与文化遺產的保護利用 " 中日系列講座 - 建築と田野調査：過去・現在・未来 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栗原伸治
2. 発表標題 " 窟洞社会 " 和 " 黄土地 " - 通過空間的共同性伝承性下來的居住空間連鎖網 -
3. 学会等名 首届世紀跟踪研究視野下的鄉村規劃与郷土建築學術研討会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八代克彦
2. 発表標題 ケンチクのしくみ ○ 展
3. 学会等名 イコ口の森
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八代克彦
2. 発表標題 基于窑洞研究開展的建造設計
3. 学会等名 ” 鄉村振興与文化遺產的保護利用 ” 中日系列講座 - 建築与田野調查：過去・現在・未來（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八代克彦
2. 発表標題 窑洞研究的成果与進展
3. 学会等名 首届世紀跟踪研究視野下的鄉村規劃与鄉土建築學術研討会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 斎尾直子
2. 発表標題 建築学領域的農村規劃及未來課題
3. 学会等名 ” 鄉村振興与文化遺產的保護利用 ” 中日系列講座 - 建築与鄉村規劃：過去・現在・未來（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 齋尾直子
2. 発表標題 建築学領域的郷村規劃及其課題
3. 学会等名 首届世紀跟踪研究視野下的郷村規劃与郷土建築学术研討会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 JIN Zhaoteng, 齋尾直子
2. 発表標題 Research on the spatial formation of Chinese villages in the process of Rural gentrification
3. 学会等名 農村計画学会2023年度秋期大会, オーラルセッション4-1-3
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栗原伸治
2. 発表標題 住まいのリアリティを求めたフィールドワークから生のリアリティを感じる日常へ
3. 学会等名 日本認知科学会第39回大会オーガナイズドセッション12「生きる」と向き合う私の「生き様」を語る」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栗原伸治
2. 発表標題 生と構築環境のリアリティを考える - 人類学的思考とその展開をもとに -
3. 学会等名 日本建築学会環境工学委員会人類学的アプローチ小委員会拡大委員会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 NyeinThirilwin・八代克彦
2. 発表標題 アジアにおける仏教寺院の日影と配置方位に関する一考察
3. 学会等名 日本建築学会2022年度大会（北海道）学術講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栗原伸治、斎尾直子、斉応涛、大野隆造、八代克彦、米野雅之
2. 発表標題 窟洞の居住空間における構成要素の連鎖網 - 中国黄土高原南部の下沈式窟洞を事例に -
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会（関東）学術講演
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 沈葉心、栗原伸治
2. 発表標題 中国の伝統的な住まいの呼称にもとづく再分類 多自然主義の観点から -
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会（関東）学術講演
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Zhaoteng JIN, Naoko SAIO
2. 発表標題 A Study of Migratory Residence Patterns and Spatial Changes in Chinese Rural Areas
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会（関東）学術講演
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 キャサリン・スーシュ / グラハム・ロット (著)、栗原伸治 (訳)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 柊風舎	5. 総ページ数 495
3. 書名 キャサリン・スーシュ「気候が建築の材料とデザインに与える影響」 / グラハム・ロット「ヴァナキュラー建築に使われる土の地質学的分類」の翻訳、サンドラ・ピシク (編)、本間健太郎 / 前田昌弘 (監訳) 『世界居住文化大図鑑 人と自然の共生の物語』	

1. 著者名 藤原成暁・八代克彦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 エクスナレッジ	5. 総ページ数 264
3. 書名 図解 世界遺産ル・コルビュジエの小屋ができるまで	

1. 著者名 栗原伸治	4. 発行年 2024年
2. 出版社 日本建築学会	5. 総ページ数 108
3. 書名 「虚像が実像になるとき - 中国映画というフィールドとワークショップ型フィールドワーク」 2024年度日本建築学会大会 建築計画部門パネルディスカッション 『フィールドワークの新しい方法 - 「みる」と「知る」の再接続』 資料集	

1. 著者名 八代克彦ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 エクスナレッジ	5. 総ページ数 142
3. 書名 「風土に根差した民居」建築知識 (2024年7月号) 『新石器・古代王朝から清朝まで / 中国の建物と街並み詳説絵巻』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	八代 克彦 (YASHIRO Katsuhiko) (80242296)	ものづくり大学・技能工芸学部・特別客員研究教授 (32422)	
研究分担者	斎尾 直子 (SAIO Naoko) (80282862)	東京科学大学・環境・社会理工学院・教授 (12608)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大野 隆造 (OHNO Ryuzo)	東京工業大学・名誉教授 (12608)	
研究協力者	米野 雅之 (YONENO Masayuki)	スタジオ ア・ノード一級建築士事務所・管理建築士	
研究協力者	齊 应涛 (QI Yingtao)	西安交通大学・人居环境与建筑工程学院・准教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 首届世紀跟踪研究視野下の鄉村規劃与郷土建築学术研討会	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 中国農村研究ミニシンポジウム	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

中国	西安交通大学	西安建筑科技大学		
----	--------	----------	--	--